

楓と白鳩

泉鏡花作

一

紫、藤紫の切、手絡がふつさりして、結綿、島田。……後に上品な鬘によく似合った、蕉園女史。——お百合さんの面影を偲ぶには、その寫眞より、おなじ人の描いた美人の繪を見るが可い。優しさも、可懐しさも、戀も、情も、活けるが如く其のまゝである。

其の人、世を憐うして、丁ど三年め……。今は一昨年に成る、輝方君。——（とお百合さん二人の中は、今めかしく言ふまでもない。）——
がまだ達者で、つい近所に、上六番町の大な邸に寂しく住んで居た頃であつた。

櫻は、さきだつて、家の庭にも、谷中天王寺の墓にも、さながら亡き人の袖の模様をやうに敬つた。……それにもどんな思ひがしたらう。梢にばかり、遅櫻の色の濃いのが、暁の夢のやうに、

まざ／＼と消賤りつゝも、早や朝風は霞を洗つて、
青葉にかはらうとする一朝の事である。

「あなた、池田さんが・・・池田さんがお見えに成りましたよ。」

と、家内に揺ぶられて、十時すぎと言ふのに、眠い目を擦つて起きた。――夫婦に成つて七年間、さながら出来たてのいろのやうだつた、蕉園女史にさきだたれて、三周忌の悲哀のまだ新しい友達が、近所に獨身で居るのに對しても、のんきに朝寐などは出来さうもない筈だし、第一おつきあひのお長屋同士にも申譯のない、此のなまけものを誰とかする・・・申兼ねるが、實は其の私なので。

むくと起きると、最う其處へ、狭い裏木戸からすぐに庭――と云ふが、精々一坪半ばかりの縁前へ来て立つて居た。

「お早う。」
と、そして寂しさうなが莞爾した。

姿がよかつた、輝方君は、誰も知つた江戸兒だか

ら、最^もう朝湯^{あさゆ}に入^はつて居^ゐる。髪^{かみ}の濡^ぬれたのを其^そのまゝ
無^む雑^ざ作^さに、帽^{ぼうし}子^しも被^かがらず、此^この春^{はる}にして二三日^{にち}、妙^{めう}
に寒^{さむ}さが續^ついたから細^{こまか}い大島^{おほしま}の不^ふ斷^{だん}着^ぎの上^{うへ}へ、一枚^{まい}、
薄^{うす}藍^{あゐ}と紺^{こん}の縞^{しま}小紋^{こもん}に、鞆^{あして}手^て形^{がた}の文^も字^じを優^{やさ}しく、

うたゝねに戀^{こひ}しき人^{ひと}を見^みてしより

夢^{ゆめ}てふものを頼^{たの}みそめてき

と、ちらしがきに染^{そめ}出した寢^ね々^ね子^こを、黒^{くろ}の半襟^{はんえり}掛^{かけ}
で、ぞろりと着^きて居^ゐた。行^{ぎやう}儀^ぎ挨拶^{あいさつ}の七面^{めん}倒^{たう}さうなお
邸^{やしき}揃^{ぞろ}の番^{ばん}町^{ちやう}を、朝^{あさ}ばら此^この扮^{いで}装^{たち}。私^{わたし}は先^まづ以^{もつ}て祝^{しゆ}着^{やく}
した。

「大層^{たいそう}、意氣^{いき}な召^めしもので。・・・」

「は、百合^{ゆわ}ちゃん^{ちやん}の寢衣^{ねまき}でしてな。はゝ。」

と一寸^{ちよつと}顔^{かほ}を背^{そむ}けるやうに仰^{あをむ}向^むいて、やけに二つば
かり、額^{ひたひがみ}髪^{がみ}を逆^{さか}に扱^こきつゝ笑^{わら}つた。裏^{うら}の紅^も絹^みを通^{とほ}し
たばかりの、袖^{そで}が翻^{ひるがへ}つて、腕^{うで}が長^{なが}い。すつきりした
男^{おとこ}だから些^{ちよつ}とも娜^{にや}氣^けない。が此^{これ}は、後^{あと}で縁^{えん}側^{がは}で煙^{たば}草^{こぼ}
盆^んなどを持^{もち}出^だしてからの事^{こと}である。

展覧會に出た、其の百合ちゃんの美人の衣裳に、
一再ならず此の小町の歌を、鹿子に染め、疋田に絞
つて、数々使つてあつた事を、新に思出す方があら
うと思ふ。尤も、それは連理の枝が、兩方に別れて
居た時分であるが、お百合さんは、此の歌が大すき
であつた。

「・・・お茶を。」

と邪慳に肩を捻ぢて、低い茶碗を取つて、向うむ
きになつて、

「頂戴します。は、は、は。」

と笑ひながら、ぐいと飲んだ。ハテナ頂戴したの
は此方であらうのに。

で、實は、最う朝酒を行つて居たらしい。その頃
はよく飲んだ。横町の床屋で、輝方君の宿俵の挽子
が、舌を巻いて話したと言ふのを聞くと、たとへば
上野へ行くのに、市ヶ谷の新坂の角の青木堂で、ポ
ケットウイスキーを一罍買つて、幌の中へ忍ばした
のを、本郷の切通を下りた處で、大溝へボンと空罍
にして、新に買込んださうである。まだ番町に引越

たてには、絹地へ乗出して畫筆を運ばして居た胸を
吻と引くと、書棚、筆架のうしろを反故ぐるみぐわ
さ／＼と引搔廻して、古新聞に突包んだ正宗の一升
罈を掴出して、「お茶を一つ――内證です。
は、は、は。．．．何うも百合ちゃんが見て居
さうでけんのんでしてな。」と少々かすれ聲で、
薄ら寒さうに襟を搔合せたものだけ。――聞
えた豪酒の英傑が、蕉園女史の情愛のために、七年
の間、見事に禁酒を徹したのであつた。それにつ
ても、最う飲まずには居られなかつたに相違ない。

お話は前後した。――處で、其の朝は、右の、
うたゝねの戀の寝々子姿で、輝方君が朝湯のあとの
一杯機嫌で、ト最初縁側で顔を合した時、鋏を一挺
引提げて莞爾々々立つて居たのだから面白い。

背後に一人、畫塾に居つきのお弟子が、若葉した
青楓の、頃合に丈の伸びたのを、兩手兩脇に夥多し
く見ゆるまで、根こぎのまゝに引抱へて、肩も胸も
眞蒼な中に、お相伴酒で赤い顔して、木戸にぎつし
りと支へて、菊壽童が蓑蟲に化けたやうに立つて居

る。

思ひついで、厚情で、風情のない私の庭へ、楓を
植込みに来てくれたのである。

「これは、何うも。」

嬉しさも嬉しいが、

「植わますかね、こんなに狭くつて。」

「何うにか成ります、遣つて見ませう。」

いや實地に臨んでは、些と狭いのに驚いたやうだ
つたが、其處はお手のものゝ、此處等で使ふのは惜
い繪心で見當を着けると、

「おい、君。――其處へ二株。……紫

陽花の芽生のうしろへ、ぐツと堀に附着けて――

然う／＼。鉢前の其の奥へ三本と……可か
らう。――さあ、二十四孝だぜ、おい来た。」

と、弟子に枝を振らせ、幹を直させ、根を扱はせ
て、自分で鋤を取つて、どか／＼と掘つて、植ゑて、
パン／＼と地をしめて、とんとならした。

兩方を前後に撓めて視て、

「や、うまいな！ 次手に散らかした處を掃かう

ぢやないか。女中ねえさんに箒ほうきをかりたまへ。―― 然さうだ、わけはない。雑ざつと掃はきだ出して、あとは女中ねえさんにおまかせだ。」

と二人ふたりでは身體からだの入いりかはりさうもない背戸せどを、紺こん足袋たびに黒くろの鞆皮なめしの緒をの草履ざうりで、すばやくボン／＼と軽かみく動うごく。…… 近火きんくわでないので勿體もつたいないやうで。

「此この青あをい影かげの水みづに映うつるのはいゝものですよ。一杯ばいくみ汲みた足たさうね。…… 植木うゑきの根ねへも水みづを灌やつて、とバケツだ。それ、もう一つ借かりて來きた給たまへ。―― いや、貸かしなさい、女中ねえさん。―― 三人にんぢやあ動うごけない。」

内うちの旦那様だんなさまには驚おどろかないのだが、餘所よその此この旦那様だんなさまには恐おそれ多おほがる、女中ぢよちゆうの手てから、バケツを引取ひきとつて、根ねへ灌そいだあとを自分じぶんで手水鉢てうづばちへ満まん々と。…… ぎつと溢こぼれるから、ひよいと退しほつて、

「もう一杯ばい。」

番茶ばんちやの香かを立てながら、茶ちやの室まのむかうから、背戸せどと茶焙ちやほいを、見みくらべ／＼、

「まあ、まあ、まあ。」
とばかり、家内は呆氣に取られて居る。

私は何か腕ぐみして、………全體恚う言ふ時は、室内なり、廊下なり、行つたり來たりすると、一役に成るのだが、大道具がちやちで、縁側が三歩で突當るのだから始末にいけない。うろ／＼して居た。

女中は取組むやうにして、寢惚つた床一つ上げもしたが、輝方君は上りもせず、縁へ腰を掛けたのであつた。

「百合ちゃんが、病中にも然う言つて居たんですよ。これで植りました。なか／＼好うございますな。」

楓の若葉はしなやかに、枝もなよ／＼と美しく、背戸は見る間に淺みどりに奥ゆかしい。

優しい緑の、且つうら若く漲る影に、蕉園さんの面影が添つた。………白百合の花が頂を白く其處に一輪咲いたらば、と私は其時、あらためて葦手

がきのうたゝねの歌を可懐く見たのであつたが――

「朝つぱらから、飛んだおさまたげを――後
ほどにまた宅へ何うぞ。」

「まあ、あなた。」

「いや、稼がざるを得ませんのです。は、は、
は、……さあ、君。」

とお弟子さんを、さきへ立たせて、づいと起つて、
「頼むよ。」

と、いま植ゑた楓を撫でた。颯と肩に青く映つて、
陽を白銀のやうに浴びた。が、影のみどりにちら／
＼と揺れた、歌の文字の、ほの白さが、背の君の肩
にかゝつた、お百合さんの指さきのやうに見えたの
である。

「――頼むよ。――」
 ・ ・ ・ ・ ・ 此の楓は根をつけた。植ゑた年は、夏
 中の夕立にも、葉は脆くこぼれたけれど、あくる年
 の秋の霜には、黄に、樺に、薄紅に、葉尖の口紅、
 臺の眞紅、とり／＼に染めはじめ、樹がまだ弱い
 からであらう、夕暮のあはれを待たず、空青く風白
 き日中にも、ばら／＼と散りがちではあつたが、次
 第に色濃く成つたのである。

日當りの加減かして、椿の陰に、鉢前に近いのは
 然もないが、木戸際の、わけて一樹は、塀を越して、
 塀を越したのが路地を出入る心ない人に見らるゝの
 が嫉ましいほど、とり分け綺麗であつた。――
 それも、かつ散るよ。

あゝ、輝方君は、植ゑて二年めの其の春のゆく時、
 既に故人になつてしまつたのである。――聲が
 其處に聞ゆるやうに、其のもみぢに風が觸る、觸れ
 ば散つて、背戸の足跡を消して行く。

寒く冷い、たそがれであつた。私は……手
水鉢の柄杓を手にした。水は溢れるほど湛へられて
――晝飯のお菜でも、氣に入つたか、背戸も女
中が珍らしくさつぱりと掃除をした――月はな
いが、其の木戸に細い幹のほの白さが見えるまで、
小枝で縋つて、唇でおくれ髪を銜へたやうに、落殘
つた紅の葉が七八枚、數へるばかり。根の暗い地に
消えようとするのが鮮明に目につくと、はら／＼と
一葉、三尺の庭と、軒に散つたのが、手水に灌ぐ一
條の水の、此のはしたない瀧にあたつて、ちら／＼
と下へ落ちた。

落ちると、ざつと流込む水に誘はれて、不器用な
植木屋の手細工のでこぼこの漆喰だが、穴はよく透
る、吸込の口へ、スツと莖の方を引込まれて、落込
みさうにした葉尖の紅が、なごりの雫に、ちり／＼
と震へてゐる。

四邊は最う薄暗い。

小溝のふちを修復して貰つた時、うらの生垣の杉
の葉屑が溝石の下に壓されようとするのに、氣を揉
んで、私は、言ひにくかつたが、植木屋に石を一度

除けさせて、青い葉屑を流させて、其の植木屋に、
苦いよりは、變な顔をされた覚えがある。

流れるのはいいが、折れたにしる、散つたのにし
る、ものゝかたちをしたものが、溝ばたの石の下敷
に封ぜられては、むかしの人柱も同じではないか。

永劫浮む瀬はありとは思へぬ。

鉢前の吸込へ陥るは、小さな石でも心持が悪いの
である。

夜ふけに　ー　柄杓の柄に居た豆粒ほどの手觸
りの蝸牛を、驚いた發奮にコトンと流へ落して、手
を洗ひながら、少時考へて、臆病窓にゝんだ事があ
る。

．．．．私わたしは安心あんしんした。此これは吸口すひくちへ流ながれ込んだに
しても、道みち上あるに疑うたがひない。

が此この一枚まいの紅あかい葉はは、然さうは行ゆかないと、手拭てぬぐひ
掛かけから熟ちつと視みるうち、チロ／＼チロ／＼と探ふかい處ところへ
水みづが響ひびく。いつもはいゝ音おとだが、此この時ときはうら悲かな
く、まさに沈しづまうとする葉末はすゑに響ひびいた。

すぐ、縁先えんさきへ蹲しゃがみ込んで、うつむけに手てを伸のばした。
が、弱よわつた。　ー　此處こゝの掃除さうじが行届ゆきとどかないで、

ぬる／＼青育と言ふ上に、些と探いから思ふやうに
指先が届かない。思ひ切つて突込めばだけれども、
此から晩飯にする處、臺所では最うちやぶ臺へ皿小
鉢のコト／＼載る音　――　然も湯に入つたばかり
である。

どれ、庭を一まはりなどと、言ふのは、演劇の舞
臺で、髯の白い爺のする事と心得たほどだから、庭
下駄などは思ひも寄らない。とに角、背戸へ出よう
とするには、一度臺所へ出て、御免よと、女中の臀
を退けて、家内の胸を分けて、すぢりもぢり水口へ
出て、女下駄の緒のぐツちよりな奴を穿かなければ
成らない。

いや、しかし、賤ヶ屋はこゝが取柄だ。雨戸の戸
袋に立掛けて、誰方に御覽に入れるのでもないから、
夏の古簾の取外したのが、巻くほどもなく雨ざらし
に押つけてある。筆つて二つ折つた。――　お茶
人が見たら浅ましがつて泣くであらう。

處が、不可い　――　巧緻繊細優推な、もみぢを、
粗造濫製な蘆の古箸で挟むのでは、深窓の美人の簪
を、案山子の弓で狙ふやうなもので、射るにも引く

にも、うまく行きさうな道理がない。いや、此奴は
不可い。

「御飯、御飯。」

と、山の神　　うまいな、うまく適合つたぞ。
一寸稗蒔の（もみぢ狩）　と言ふ場面だから、こゝ
でこそ山の神　　が臺所で呼ぶトタンに、女中
の手で茶の間へ電燈がばつと點いた。

「・・・くひしんばうが、・・・何をし
て辭なさるんだえ。」

と其の女中に聲を掛けながら、臺所の扉を開けて、
山の神が、前垂で手を拭きながら顯れた。

怪訝とも、變とも、妙とも、馬鹿々々しいとも思
ふ處を・・・心を知つて堪忍して・・・何
にも言はずに、ついと膝をつくと、簪を抜いて消え
ようとする寸縷の紅を、ぢつと撓めて挟んで、上へ
取つた。其の紅の葉ほどもない、いかゞな玉の銀脚
が、しかし私目には、白金の如くキラ／＼と濡縁
暗き夕暮に輝いて映つた。

眞夜中に、ふと目を覺すと……何うも其れが例の宵張のうへ寐つかれない癖だから、うと／＼眠り掛けたのが、又冴返つたものゝやうにも思はれるが……鼠も一騒ぎ騒ぎ草臥れた、ひつそわした寢床の例の縁の障子に、さら／＼と觸るものがある。

「お静まり下さい。……私は決して御婦人に怨をうけた覺えはないから、幽霊が長い逆髪で撫でるなどゝは、うと／＼でも、はつきりでも、聊かも思つたのではない。

しかし、さら／＼と鳴つて、一寸静まるかと思ふと、又さら／＼と縁の外から帽子を撫でる敷居の上から腰板を越して、小間三つばかりの間を、上に成つたり、下に成つたり、さらさら／＼／＼と、霜夜の枕にも、袖にも響く。

壁の土でも、こぼれて落ちるか、其にしては音が軽い。蝶にしても、蛾にしても、可なり大い……と思つたのが少々寢惚けて居る……

・今時そんなものが、と心附くとともに、**■**か、
蟋蟀かと思ふが、それには又響きが薄い。

とに角、氣に成るから、寝ぬくもつた足を抜いて、
障子を――其の觸らない方へ開けた。

氷のやうな月が射す、さすがに心張棒をぎしとか
つて、雨戸に隙間は見せないが、節穴からは衝と光
がさし込む。それに、縁板の合せ目から上へ映る影
が、下には枯尾花でもありさうに白く透く、月光は
閨の下までも流るゝらしい。ト其の光をちら／＼と
浴びて、障子に飛ぶのは、色も明かに見えた、銀に
象嵌をしたやうな紅の葉である。然も二枚、もつれ
合つたのが、いま開けた煽で、一枚、ツツと傍へ開
いて縁をすべると、一枚は、ちら／＼と上へ舞つた。
音はもろともに、さら／＼と聞えた。

戸外は眞晝のやうで、そよとの風もない。霜を結
ぶ氣の力に煽られて、空蝉よりも軽いもみぢが、羽
を翻したのであらう。

私は密と拾つた。

そして一枚は、必ず、先刻夕方、鉢前の水に沈ま
うとしたのに相違ない。それが寂しさに、つれを誘
つて来たらしい。

が、あらたに水も濯いだけれども、濡れても居た
し、其のまゝ内へ入れたのではない。縁外の石の上
へ確に置いて、そして雨戸をしめたのであつたに。

私は夢かと思つた。

恥を言はねば――よく恥を言ふ男だが――
私は十八九の時、寝しなに田舎汁粉を三杯と食過
ぎて、眠ると、外は月夜だつたのに、俄に大雨が降
つて来て、雹の如く雨戸を叩き、戸障子をうつて破
つて、礫の如く面を打ち、枕を打ち、衾を打つて、
雹も雨も血のやうに眞赤で、可恐く魘された覚えが
ある。

たそがれの事のあつたゝめ、これは、もみぢの夢
であらう。

しかし同じ葉であるのは疑はなかつた。

「どうもお寒う。」

私は二枚を掌に取った。――輝方君とお百合さんがお二人で、夜中遊びに……。・・・と思つたのである。

「ようこそ。」

衾へ戻つて、枕もとへ置いて、莞爾した時、思はずゾツとした。我ながらフト凄かつた。

たゞし聊かも、不気味な事も、可恐い事もなかつたのである。

家内はわきに、すや／＼寐て居た。

夜が開けても、紙に据ゑたまゝ、二葉、二つ、うつくしかつたから、夢ではない。――私は敢て輝方君とお百合さんの、氣が、魂が、ふはりと此の葉に乗つて音訪れたとは言はないけれども、其の私たちの帯の模様、小袖の紋が氣まぐれに一寸遊びに來たことは信ずるのである。其の目の午後から時雨した。

さて時雨れ／＼て、時雨れつゝあけた、半月ばかり経つた朝であつた。

飯めしのあとに、長火鉢ながひばちに頼杖ほつえ、と言いふと暢氣のんきらしいが、煙管きせるを横銜よこくはへに算段面さんだんづらと言いふのをして居ゐると、立違たちちがつた家内かないが、吃驚びっくりしながら嬉うれしさうな顔かほをして、

「大急おほいそぎ。」

と縁えんの障子しやうじにつかまつて居ゐて招まねく。

「何なにさ。」

と不精ぶしやうらしく、のそりと出でて見みると、眞白ましろな鳩ほとが一羽は、しぐれに濡ぬれつゝ、それにも翼うばが汚よじれよう、場所ばしよ、もあらうものを、背戸せとの隅すみのコークス箱ぼこの蓋ふたに、しなやかに居ゐて、三俵だらぼつち法師ほうしからこぼれた米こめを拾ひろひながら、人懐ひとみかしい優やさしい目めで、私わたしたちを見みて莞にづ爾こり……いや唯ただ挨拶あいさつをした。

「止とせ。」

と云いふのに、家内かないは羽はたゝきも騒さわぎもしない柔やはらかな、白しろいものを、素膚すはだの人形にんぎやうを抱だくやうに、確しつりと、しかし密みつと袖そでに取とつた。

「寒さむいでせう、よく來きたのね　――　澤山たくさんおあが

り。」

離すと、塀を越えてスツと飛んだ。

「それ言はない事ぢやない。柄にないよー

鳩が怯えらあね。」

一つ、へこまして、私は以前の如く、火鉢で算段面をして居た。

へこまされて、尙未練らしく障子に半身で縁を覗いて居た家内が、ト目を細くして、又おいで／＼を遣つた。

それで分る・・・鴉が歸つたなと、思つて出ると、おなじ眞白なのが別に一羽、どつちが雄だか、恰も雨があがつて、此のあとは、玉のやうな陽に、育も胸も光つて居た。

私たちの心も輝く。

雙の白鳩は、陸じくコークスの上を入かはり、もつれ合ひ、向合ひ、譲合つてつえばんだ。

此の鳩にことづけた。

草双紙の間に挟んでは置くが、色のうつろふのを惜んだ二枚のもみぢを、紅と白の練絲ーー反物の飾絲だから資本は一向にかゝらないーー絲で

とめて、脚あしに結むすんで、抱だいて、ふくめて、もの干ほしから衝つと放はなした。

一さき雙さきの雪ゆきなす鳩はとは、あの、水すゐ晶しやうの目めで頷うなづいた。青あを空そらに二筋すぢの白しろい雲くもを引ひくと、高たかく紅くれなゐが閃ひらめいた。

「此これは……嘘うそか、真まことか、蕉園せうゑん女史ぢよしが愛あい讀どくしたと言いふ、ある作家さくかが私わたしへの話はなしなのである。

【完】